

両親の夫婦関係が子供の 結婚願望に及ぼす影響について

——両親の結婚生活コミットメント及び夫婦仲に注目して——

森 香織*・桂田恵美子**

抄録：本研究では夫婦関係が大学生の子供の結婚願望に与える影響について、子供自身が認知する両親の結婚生活コミットメントと夫婦関係の愛情面から検討した。本研究の仮説は、子供が両親の夫婦関係と結婚生活コミットメントを前向きに捉えているほど子供の結婚願望が強いというものであった。また、女性は母親の、男性は父親の結婚生活コミットメント認知により影響を受けるという仮説もたてた。結果は、結婚願望がある子供の方が、両親の夫婦関係や結婚生活コミットメントのポジティブな側面での評価が高かったことから、最初の仮説は支持された。しかし、子供の結婚願望の差は両親の結婚生活コミットメントのネガティブな側面にはあまり見られなかったことから、親の結婚生活コミットメント認知は親の夫婦関係が良好である場合にのみ子供の結婚願望に影響すると考えられる。また、女性の結婚願望の差は母親だけでなく父親の結婚生活コミットメントにも示されており、男性においては母親の結婚生活コミットメントにおいてのみ差が示された。この結果から、同一性の親の影響力が大きいという仮説は支持されなかった。

問題と目的

現在日本では、婚姻率の低下がみられている。日本国内の婚姻件数は1972年に109万9984件と最高値を記録したが、2015年には63万5096件と年を追うごとに減少している(2015年人口動態統計より)。この婚姻率低下を招いている原因のひとつとして晩婚化や非婚化が挙げられている(斎藤, 2012)。また、婚姻率の低下という問題が起こっている一方で離婚率の上昇もみられている。これらのことは出生率の低下を招き、現在日本が抱えている少子化問題の直接的な原因になっていると考えられる。

こうした結婚への消極的な傾向の原因として、女性の社会進出といった社会的なものから、個人の心性といった個人的なものまで様々に考えられる。晩婚化・非婚化の要因を検討した研究は今まで多くなされてきた。社会的な要因として女性のライフスタイルが多様化したことにより女性の職業観が変化していること(城島・白河・幸田・城, 2012)や、個人的な要因として、現代の若者は現在送っているシングルライフに満足しており、結婚生活に利点がないとは思わないが、理想の相手が見つかって一緒に暮らしたいと思えるならば結婚したいと考えていることが研究により示されている(神原, 2004)。その中でも社会と個人の間といえる要因として育った家族(定位家族)に着目したのが斎藤(2012)の研究で

ある。夫婦関係が子供の結婚観に与える影響を実証的に示す研究は今まであまりなされてこなかったが、斎藤は、若者のもつ将来の婚姻関係のビジョンが育ての親の夫婦関係に一定の影響を受けると考えた。親の夫婦関係を、夫婦の居住形態やともに過ごす頻度といった客観的關係性と夫婦関係満足度など夫婦当人たちの心的側面である主観的關係性の2側面から捉え、大学生を対象に両親の夫婦関係をどのように認識しているのかについて調査を行った。その結果、親がそろって外出しないこと、そしてけんかをするのが、子供の結婚への希望を妨げている可能性が指摘された。親が不仲でいることは、子供にとって将来のパートナーとの関係や結婚生活へのイメージを消極的なものにしかねないと考えられる。

また、両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響について研究したものに山内・伊藤(2008)の研究がある。山内・伊藤は、両親の夫婦関係が青年の結婚観に影響を与えるメカニズムについて直接ルートとモデリングルートの2つから検討した。直接ルートとは、親の夫婦関係が直接的に結婚観を変化させるというものであり、モデリングルートとは、親の夫婦関係が子供の恋愛関係に影響し間接的に結婚観に影響を与えるというものである。研究の結果、直接ルート、モデリングルートともに存在を認めることができた。しかし、モデリングルートにおいては、両親の夫婦関係に対する青年の主観の評価が高い時のみ青年の恋愛関係に影響を与えていることが

*関西学院大学文学部

**関西学院大学文学部教授

示された。子供は両親の夫婦関係を高く評価しているほど自身の結婚観・恋愛観に影響を受けることが明らかになった。

これらの先行研究から、子供が認知する両親の夫婦関係は子供の結婚願望や結婚観に影響を与えるということが示された。晩婚化や非婚化に影響を与える要因として、社会や個人だけでなく両親の夫婦関係についても考える必要がある。

現在日本では年々平均寿命が延びており、結婚生活も長期化している。それに伴い夫婦関係を考えるうえで、どうして結婚生活が継続されているのかといった夫婦の結婚へのコミットメントに着目した研究も行われてきた。宇都宮（2004）は子供自身が認知する両親の結婚生活コミットメントがどのような性質であるかが女子青年の自己肯定を左右する重要な一因であると考えた。研究の結果、親の結婚生活コミットメントが女子青年の自己肯定と関係があるということが示された。特に、母親が社会的圧力や無力感から、また経済的な理由から結婚を維持していると子供自身が認知している場合、女子青年の自己肯定に否定的に作用することが示された。

さらに宇都宮（2005）は、青年期の子供から見た両親の結婚生活コミットメントと女子青年の不安の関連性について明らかにした。夫婦関係を継続している理由が情愛的で前向きな理由であるほど子供の不安は低く、社会的圧力や無力感などの後ろ向きな理由であるほど子供の不安は高くなる傾向にあり、特に同性である母親が結婚生活を継続している理由をどのように認知しているかが重要であると示された。また、この宇都宮（2005）の研究では両親の夫婦関係の良好さと結婚生活コミットメント認知は関連していることが示されている。結婚生活が情愛的な理由によって継続されていると捉えているほど、反対に社会的圧力や無力感によるものではないと捉えているほど子供は両親の夫婦関係が良好であると考えられる傾向にあった。

以上の研究から、両親の夫婦関係によって子供の結婚願望が左右されること、両親の結婚生活コミットメントは子供の不安や自尊心などの心理に影響を与え、更に、結婚へのコミットメントと夫婦関係が関連していることが示された。しかし、両親の結婚生活コミットメントと子供の結婚願望の関連を検討した研究はない。また、宇都宮（2004・2005）の研究は女子青年のみを対象としており、男子青年については検討されていない。同性の親の結婚生活に対するコミットメントのほうが将来の自分と重ね合わせやすいため、調査対象者が男子青年の場合、母親のコミットメントよりも同性である父親のコミットメントに影響を受けるのではないかと考えられる。そこで、本研究では親の夫婦関係が子供の結婚願望に与える影響について、子供自身が認知する両親の結婚生活

コミットメントと夫婦関係の良好性から検討した。仮説は以下の2つである。仮説1は、両親が結婚生活を維持している理由を子供がポジティブに捉えているほど子供の結婚願望が強く、また夫婦関係が良好であると感じているほど結婚願望が強い、である。仮説2は、女子学生は母親の結婚生活コミットメント認知に、男子学生は父親の結婚生活コミットメント認知により影響を受ける、である。

方 法

1. 調査日時・場所

データ収集は2016年10月中旬に2つの心理学の授業で行った。関西学院大学の講義中に質問紙を配布し、回収した。

2. 調査対象者

関西学院大学に所属する学生1年生～4年生を対象に行った。回答者は282名（男性53名、女性229名）であったが、未回答があったものや両親が既に離婚している16名を除いた266名（男性50名、女性216名）を有効回答者とした。有効回答者の平均年齢は20.2歳（範囲：19～31歳）であった。

3. 調査内容

質問紙の内容は回答者自身の結婚願望等に関する質問、両親の夫婦関係を問うものであった。質問紙は教示の他に回答年月日、学年、学部、年齢、性別を問う項目を設けた表紙と質問項目から成る計7ページであった。質問内容の詳細は以下のとおりである。

① 結婚願望と結婚や恋愛への積極性に関する質問

「将来結婚したいか」「何歳で結婚したいか」「結婚相手を見つけるために婚活に参加したいと思うか」「婚活に参加したくない理由」「現在交際している、もしくは過去に交際していたことはあるか」「交際するために自ら行動するか」「両親の結婚年数」の7つの質問を用いた。「現在交際している、もしくは過去に交際していたことはあるか」「交際するために自ら行動するか」「結婚相手を見つけるために婚活に参加したいと思うか」「将来結婚したいか」の4つの質問は「はい」と「いいえ」の2件法で尋ねた。「婚活に参加したくない理由」については、「結婚相手を見つけるために婚活に参加したいと思うか」で「いいえ」と答えた場合のみ自由記述で回答を求めた。「何歳で結婚したいか」という質問に対しては、「将来結婚したいか」で「はい」と答えた場合のみ回答を求め、20歳～25歳を1、26歳～30歳を2、31歳～35歳を3、36歳以上を4とした4件法で尋ねた。「両親の結婚年数」は正確な年数が分からない場合はおおよその年数を回答させた。

② 両親の夫婦関係に関する質問

山内・伊藤 (2008) によって作成された「両親の夫婦関係良好性尺度」を用いた。この尺度は子供から見た両親の夫婦関係を測定するために作成された。「相手に対して優しくする」「相手のことが好きだ」「会話を大切に」など12項目で構成された「愛情」因子、「相手につらくあたることがある」「相手にいやみを言う」「話していてもすぐけんかになる」など7項目で構成された「葛藤」因子、「相手に遠慮することがある」「何かと相手に合わせる」「相手に対して不満があっても、うちあけられない」など4項目で構成された「抑制」因子の3つの因子から成っており、全23項目であった。山内・伊藤による本尺度作成の際の α 係数は「愛情」因子は.93、「葛藤」因子は.78、「抑制」因子は.81であり信頼性が確認されている。山内・伊藤 (2008) の研究では、3因子のうち、「抑制」因子は夫婦関係評価高群では夫婦関係を比較的良好であると認知している傾向があるのに対し、低群では逆の傾向がみられ同質性が保たれていなかった。また、「葛藤」因子より「愛情」因子のほうが子供の夫婦関係評価や自身の恋愛関係評価への影響が強かったことから、本調査では、夫婦関係良好性としてパートナーに対する愛情を示す項目である「愛情」因子に焦点を当て、「愛情」因子である12項目を用いた。山内・伊藤 (2008) では、一方の親（父親または母親）の視点で答えるようになっているが、本研究では両親の関係を測定するという意味で、内容が変化しないよう注意したうえで両親用に書き換え使用した（「相手を支えてあげる」→「両親は互いに支えあっている」など）。本研究では各項目について「当てはまる」から「当てはまらない」の5件法で回答を求めた。得点が高い方が夫婦の関係性が良好であるとなるように採点した。本研究での夫婦関係良好性尺度の α 係数は.97であり、高い信頼性が確認された。

③ 両親の結婚生活に対するコミットメントに関する質問

宇都宮 (2005) によって作成された「両親の結婚生活コミットメント認知尺度」を用いた。この尺度は子供の目線から両親の結婚生活コミットメント、すなわちどうして結婚生活が持続されているのかを多面的に測定することを目的としている。父親用、母親用同じ質問項目を使用し、全28項目の4因子から成っている。1つ目の因子は「母（父）を一人の人間として深く尊敬しているから」など10項目で構成された「存在の全的受容・非代替性」因子であり、配偶者への情愛的要因によって結婚生活を継続させているといったものである。2つ目の因子は「情性で持ちこたえている」など8項目で構成された「社会的圧力・無力感」因子であり、非自発的な理由から結婚生活を継続させているといったものである。

3つ目の因子は「家族の分裂は避けたいと思っているから」など6項目で構成された「永続性の観念・集団志向」因子であり、家族の絆や婚姻制度への忠誠を重視する性質のコミットメントである。4つ目の因子は「一人の生活は何かと不便だから」など4項目で構成された「物質的依存・効率性」因子であり、配偶者がいることで得られるメリットによって結婚生活を継続させているといったものである。宇都宮による本尺度作成の際の各因子の α 係数は父親の尺度が.56~.87の範囲に、母親の尺度の範囲が.59~.87の範囲にあり信頼性が確認されている。本研究においても、4つの因子を指定して因子分析を行ったところ、「物質的依存・効率性」因子に含まれる「母（父）がいろいろと役に立つから」のみ因子負荷量が低かったため除外し、全27項目で再度因子分析を行った。その結果、4因子はオリジナル尺度と同じであった。本研究における父親の4因子の α 係数が.69~.95の範囲に、母親の4因子は.67~.95の範囲にあり信頼性が確認された。本研究では全27項目の尺度を使い、各項目について「当てはまる」から「当てはまらない」の5件法で回答を求めた。因子ごとに合計得点を算出し、得点が高い方がその因子の特徴が強いとなるように採点し分析に用いた。

4. 手続き

関西学院大学の講義時間の一部を使って質問紙を配布した。配布する際、本調査が大学生の結婚願望に関するものであること、本調査は無記名であるため個人が特定されるようなことはないこと、本調査は強制的なものではなく、回答を拒否することで不利益が生じることはないことなどを口頭で説明した。回答に要する時間は10分程度であり、回答後に質問紙を回収した。

結 果

1. 両親の夫婦関係良好性得点と結婚生活コミットメント認知尺度の各因子との相関

両親の夫婦関係の良好性と結婚生活コミットメントとの関係をみるために、両親の夫婦関係良好性得点と父親、母親それぞれの結婚生活コミットメント認知尺度の各因子との相関分析を行った。相関係数を Table 1 に示した。分析の結果、父母ともに夫婦関係良好性得点と「存在の全的受容・非代替性」との間に有意な正の相関がみられ、「社会的圧力・無力感」「永続性の観念・集団志向」「物質的依存・効率性」の3因子においては、有意な負の相関がみられた。

2. 子供の結婚願望と両親の夫婦関係との関連について

両親の夫婦関係が子供の結婚願望に影響を与えるのかを調べるために、「将来結婚したいか」という質問に対

Table 1 両親の夫婦関係良好性得点と父母の結婚生活コミットメント認知尺度の各因子との相関係数

	夫婦関係良好性得点	母親・存在の全的受容・非代替性	母親・社会的圧力・無力感	母親・永続性の観念・集団志向	母親・物質的依存・効率性	父親・存在の全的受容・非代替性	父親・社会的圧力・無力感	父親・永続性の観念・集団志向	父親・物質的依存・効率性
夫婦関係良好性得点									
母親・存在の全的受容・非代替性	.87 **								
母親・社会的圧力・無力感	-.54 **	-.47 **							
母親・永続性の観念・集団志向	-.27 **	-.13 *	.67 **						
母親・物質的依存・効率性	-.30 **	-.22 **	.52 **	.62 **					
父親・存在の全的受容・非代替性	.82 **	.84 **	-.43 **	-.17 **	-.25 **				
父親・社会的圧力・無力感	-.40 **	-.31 **	.75 **	.58 **	.50 **	-.38 **			
父親・永続性の観念・集団志向	-.17 **	-.07	.56 **	.79 **	.47 **	-.05	.63 **		
父親・物質的依存・効率性	-.10 +	-.07	.50 **	.58 **	.49 **	.01	.43 **	.54 **	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 2 結婚願望有り・無し別にみた父母の結婚生活コミットメント得点

	結婚願望有り群		結婚願望無し群		t 値	
	M	SD	M	SD		
<u>母親のコミットメント</u>						
存在の全的受容・非代替性	33.96	9.81	25.61	11.70	4.43	***
社会的圧力・無力感	18.45	6.03	20.30	6.65	-1.71	
永続性の観念・集団志向	16.88	5.24	17.96	5.24	-1.24	
物質的依存・効率性	8.94	2.85	10.16	2.42	-2.96	**
<u>父親のコミットメント</u>						
存在の全的受容・非代替性	36.79	9.25	30.14	11.14	3.72	***
社会的圧力・無力感	16.94	6.58	18.80	6.85	-1.65	
永続性の観念・集団志向	16.94	5.99	18.00	5.67	-1.12	
物質的依存・効率性	8.78	3.15	8.48	3.31	0.57	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

して「はい」と答えたものを「結婚願望有り群」, 「いいえ」と答えたものを「結婚願望無し群」に分け, 結婚願望有り群と結婚願望無し群で両親の夫婦関係に違いがあるのかについて検討した。結婚願望有り群は男性 38 名 (76%), 女性 184 名 (85%), 結婚願望無し群は男性 12 名 (24%), 女性 32 名 (15%) であった。まず, 男女で結婚願望の有無や夫婦関係良好性得点に差があるのかについて分析を行った。結婚願望の有無については χ^2 検定, 夫婦関係良好性得点については対応のない t 検定を行ったが, 結婚願望の有無 ($\chi^2(1) = 2.48, ns$), 夫婦関係良好性得点 ($t(71.86) = -1.23, ns$) とともに有意な差はみられなかった。結婚生活コミットメント各因子についても男女差をみるために対応のない t 検定を行ったが母親の「存在の全的受容・非代替性」($t(76.22) = -0.95, ns$), 「社会的圧力・無力感」($t(79.97) = 0.67, ns$), 「永続性の観念・集団志向」($t(69.26) = -0.03, ns$),

「物質的依存・効率性」($t(74.03) = -1.59, ns$), 父親の「存在の全的受容・非代替性」($t(73.88) = -1.98, ns$), 「社会的圧力・無力感」($t(78.42) = 1.77, ns$), 「永続性の観念・集団志向」($t(71.17) = 0.52, ns$), 「物質的依存・効率性」($t(72.11) = -0.62, ns$) のすべての得点で男女間の有意な差は見られなかった。

結婚願望有り群と結婚願望無し群で両親の夫婦関係良好性得点に差があるのかについて検討するために, 対応のない t 検定を行った。その結果有意な差がみられ, 結婚願望有り群 (平均値 = 43.50, SD = 11.91) のほうが結婚願望無し群 (平均値 = 34.27, SD = 14.67) よりも両親の夫婦関係良好性得点が高かった ($t(54.79) = 3.92, p < .001$)。次に, 結婚願望有り群と結婚願望無し群で両親の結婚生活コミットメント認知に差があるのかについて検討するために, 対応のない t 検定を行った。その結果を Table 2 に示した。結婚願望有り群と結婚願望無

Table 3 結婚願望有り・無し別にみた父母の結婚生活コミットメント得点の差の検定 (男性), $n = 50$

	結婚願望有り群		結婚願望無し群		t値
	M	SD	M	SD	
<u>母親のコミットメント</u>					
存在の全的受容・非代替性	33.63	8.91	24.08	10.82	2.78 *
社会的圧力・無力感	18.95	5.35	20.17	6.58	-0.58
永続性の観念・集団志向	16.03	5.05	20.25	6.40	-2.09
物質的依存・効率性	8.18	2.69	9.83	2.79	-1.80
<u>父親のコミットメント</u>					
存在の全的受容・非代替性	34.92	9.02	27.83	10.53	2.1
社会的圧力・無力感	18.26	5.95	19.92	6.90	-0.75
永続性の観念・集団志向	16.68	5.94	20.17	6.39	-1.67
物質的依存・効率性	8.50	3.28	8.42	3.29	0.08

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4 結婚願望有り・無し別にみた父母の結婚生活コミットメント得点の差の検定 (女性), $n = 216$

	結婚願望有り群		結婚願望無し群		t値
	M	SD	M	SD	
<u>母親のコミットメント</u>					
存在の全的受容・非代替性	34.02	10.01	26.19	12.13	3.45 **
社会的圧力・無力感	18.34	6.17	20.34	6.78	-1.56
永続性の観念・集団志向	17.06	5.27	17.09	4.56	-0.04
物質的依存・効率性	9.10	2.86	10.28	2.3	-2.58 *
<u>父親のコミットメント</u>					
存在の全的受容・非代替性	37.17	9.31	31.00	11.39	2.90 **
社会的圧力・無力感	16.67	6.68	18.38	6.89	-1.30
永続性の観念・集団志向	17.00	6.01	17.19	5.25	-0.19
物質的依存・効率性	8.84	3.13	8.50	3.37	0.54

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

し群との間に母親のコミットメント認知では、「存在の全的受容・非代替性」「物質的依存・効率性」に有意な差が、父親のコミットメント認知では「存在の全的受容・非代替性」に有意な差がみられた。父母両者の「存在の全的受容・非代替性」では結婚願望有り群のほうが結婚願望無し群よりも得点が高かったのに対し、母親の「物質的依存・効率性」では結婚願望有り群のほうが結婚願望無し群よりも得点が低かった。

両親の結婚生活コミットメント、結婚願望ともに男女差はみられなかったが、同性の親の影響の方が強いという仮説2を検証するために、男女別に結婚願望有り群と結婚願望無し群で両親の結婚生活コミットメント認知の各因子に差があるのかについて対応のないt検定を行った。男性の結果をTable 3、女性の結果をTable 4に示した。男性においては、母親の「存在の全的受容・非代替性」にのみ有意な差がみられ、結婚願望有り群のほうが結婚願望無し群よりもコミットメント得点が高かつ

た。女性においては、母親の「存在の全的受容・非代替性」、「物質的依存・効率性」、父親の「存在の全的受容・非代替性」に有意な差がみられ、「存在の全的受容・非代替性」では結婚願望有り群のほうが結婚願望無し群よりもコミットメント得点が高く、「物質的依存・効率性」においては結婚願望有り群よりも結婚願望無し群のほうがコミットメント得点が高かった。

3. 子供自身の恋愛、結婚に対する積極性と両親の夫婦関係との関連

子供の結婚願望と両親の夫婦関係に関連がみられたため、さらに子供自身の恋愛、結婚に対する積極性と両親の夫婦関係について検討した。「現在交際している、もしくは過去に交際していたことがあるか」「交際するために自分から行動するか」「将来結婚するために婚活に参加したいか」という質問にたいして「はい」と回答した人と「いいえ」と回答した人で夫婦関係良好性得点に

差があるかを検討するために対応のない t 検定を行った。その結果、すべての質問において有意な差は見られなかった。次に結婚生活コミットメントとの関連を見るため、対応のない t 検定を行った。その結果、「交際するために自分から行動するか」という質問において母親の「存在の全的受容・非代替性」(「はい」平均値 = 33.94 (SD = 10.01), 「いいえ」平均値 = 31.17 (SD = 11.02), $t(259.84) = 2.15, p < .05$), 「永続性の観念・集団志向」(「はい」平均値 = 16.11 (SD = 5.06), 「いいえ」平均値 = 18.04 (SD = 5.27), $t(262.74) = -3.04, p < .01$), 「物質的依存・効率性」(「はい」平均値 = 8.73 (SD = 2.83), 「いいえ」平均値 = 9.57 (SD = 2.74), $t(264) = -2.48, p < .05$), 父親の「存在の全的受容・非代替性」(「はい」平均値 = 37.22 (SD = 9.17), 「いいえ」平均値 = 34.12 (SD = 10.40), $t(257.81) = 2.58, p < .05$), 「永続性の観念・集団志向」(「はい」平均値 = 16.29 (SD = 5.58), 「いいえ」平均値 = 17.97 (SD = 6.19), $t(259.46) = -2.32, p < .05$) に有意な差がみられた。「存在の全的受容・非代替性」では、交際するために自ら行動すると回答した人の方が得点が高かったのに対し、母親の「永続性の観念・集団志向」, 「物質的依存・効率性」, 父親の「永続性の観念・集団志向」では行動しないと回答した人の方が得点が高かった。また、結婚願望有り群のほうが結婚願望無し群よりも夫婦関係が良好であったため、結婚希望年齢と夫婦関係との関連について検討した。結婚希望年齢(4分類)と夫婦関係良好性得点について1要因分散分析を行った。その結果、夫婦関係良好性得点における結婚希望年齢の効果は有意ではなかった。同様に結婚生活コミットメント各因子についても1要因分散分析を行ったが、結婚生活コミットメントにおいても結婚希望年齢の効果は有意ではなかった。

考 察

本研究では両親の夫婦関係が大学生の子供の結婚願望に与える影響について、子供自身が認知する両親の結婚生活コミットメントと夫婦関係の良好性から検討した。仮説は以下の2つである。仮説1は、子供が両親の夫婦関係が良好であると感じているほど結婚願望が強く、両親が結婚生活を維持している理由を子供がポジティブに捉えているほど結婚願望が強い、である。仮説2は、女子学生は母親の結婚生活コミットメント認知に、男子学生は父親の結婚生活コミットメント認知により影響を受ける、である。本研究では両親の夫婦関係を、結婚生活を維持している理由である「両親の結婚生活コミットメント認知尺度」と夫婦関係の良好性を表す「両親の夫婦関係良好性尺度」の愛情因子を用いて検討した。以下、得られた結果について考察する。

1. 両親の夫婦関係良好性と両親の結婚生活コミットメントの関連について

子供の目から見た両親の夫婦関係良好性と父母の結婚生活コミットメント認知に関連があるのかを検討するために相関分析を行った結果、両親の夫婦関係良好性得点と父母の結婚生活コミットメント認知尺度の4因子(「存在の全的受容・非代替性」「社会的圧力・無力感」「永続性の観念・集団志向」「物質的依存・効率性」)すべての間に有意な相関がみられた。父母の「存在の全的受容・非代替性」では、両親の夫婦関係が良好であるほど得点が高かった。反対に、「社会的圧力・無力感」「永続性の観念・集団志向」「物質的依存・効率性」では、両親の夫婦関係が良好であるほど得点が低かった。宇都宮(2005)は、両親の結婚生活コミットメント認知尺度のうち、「存在の全的受容・非代替性」を配偶者への情愛的要因によって結婚生活を継続させている場合に優勢となる因子であると述べている。本研究においても両親が結婚生活を情愛によって続けていると認知している者は、両親の夫婦関係が愛情深いものと捉えているということが示された。また、宇都宮は「社会的圧力・無力感」「永続性の観念・集団志向」「物質的依存・効率性」においては、結婚生活を愛情ではなく、非自発的な理由や機能面を重視しているといった理由で続けている因子であり、これらの因子が強いと認知されると、両親の関係が良好ではないと認知されると述べている。本研究においてもこれらの因子は夫婦関係良好性得点と負の相関が見られたことから、これらの因子は愛情とは関係なしに結婚生活を続けている理由であることが示された。つまり、両親の結婚生活コミットメント認知尺度の「存在の全的受容・非代替性」のみ愛情深い夫婦関係と正の関連を示しており、ポジティブな認知であると言える。

2. 子供の結婚願望と両親の夫婦関係との関連について

子供の結婚願望と両親の夫婦関係との関連について検討するために、回答者を「結婚願望有り群」と「結婚願望無し群」に分け、両親の夫婦関係良好性尺度と両親の結婚生活コミットメント認知尺度それぞれにおいて違いがあるのか検討した。その結果、結婚願望がある人の方が結婚願望のない人よりも両親の夫婦関係が良いと捉えており、両親の結婚生活が継続されている理由が「存在の全的受容・非代替性」という情愛的な理由であると認知していることが示された。両親の夫婦関係が良好であると子供の結婚願望が強いということができ仮説1は支持された。一方、比較的ネガティブな認知である「社会的圧力・無力感」「永続性の観念・集団志向」「物質的依存・効率性」と結婚願望との関連については、女性においてのみ母親の「物質的依存・効率性」でみられた。つまり、自分の母親が経済的な理由などで結婚を継続して

いると認知している女子学生は夫の収入に頼るような結婚はしたくないと考えている可能性がある。今回は調査項目に入れなかったが、女子学生のキャリア志向なども含めるとより詳細な分析ができたと思う。

その他の比較的ネガティブな因子では男女共に結婚願望による違いが見られなかったため、両親の結婚生活コミットメントのネガティブな側面は子どもの結婚願望にあまり影響しないと考えられる。山内・伊藤（2008）の研究では、両親の夫婦関係よりも子供自身の恋愛関係のほうが結婚観に対する影響が大きかった。両親の夫婦関係が良好でなくても、自身の恋人との関係が良好であれば結婚観はネガティブなものにならず、それが子供自身の結婚願望にも関係した可能性がある。本研究では、現在の恋愛関係については一切聞いていないので、今後は大学生のこれまでの恋愛経験なども調査に含めるべきである。

3. 子供自身の恋愛、結婚に対する積極性と両親の夫婦関係良好性との関連

結婚願望の有無だけでなく、結婚や恋愛に対する積極性についても夫婦関係によって違いがあるのかについて検討した。その結果、「交際するために自分から行動するか」という質問で「はい」と答えた者の方が両親の結婚生活が継続されている理由が「存在の全的受容・非代替性」であり「永続性の観念・集団志向」ではないと認知していることが示された。両親の夫婦関係は子供の恋愛に対する積極性にも影響を与えていると言える。しかし、「結婚希望年齢」や「婚活への参加」と両親の夫婦関係には関連がみられなかった。これら、3つの項目は結婚願望の強さを表すものとして質問項目に入れたが、結婚希望年齢や婚活への参加は大学生にとっては必ずしも結婚願望の強さを表すものではなかったと言える。本調査において婚活に参加したくないと回答した人の参加したくない理由の多くは、自然に出会いたい、そこまでしたくないといった理由であった。大学生という身分では、まだ、結婚に現実味が無いので、このような回答が多かったと思われる。もっと年齢の高い独身者を対象とした場合には、このような項目も結婚願望の強さを表すものとして有効になるのではないかと考える。

4. 男女における違いについて

両親の夫婦関係良好性得点、両親の結婚生活コミットメント認知尺度各因子、結婚願望においては男女間の差は見られなかった。しかし、宇都宮（2004）は、女子青年は父親よりも母親の結婚生活コミットメント認知のほうが自身の自尊感情に密接に関連していると述べていた。そこで、男女で影響を受ける親のコミットメント認知が異なるのかについて検討した。その結果、男性で

は、母親の「存在の全的受容・非代替性」にしか結婚願望有無の差がみられなかったのに対し、女性においては、父母両方の「存在の全的受容・非代替性」、母親の「物質的依存・効率性」に差がみられた。この結果から、本研究の仮説2である女子学生は母親の結婚生活コミットメント認知に、男子学生は父親の結婚生活コミットメント認知により影響を受けるという仮説は支持されなかった。本研究の結果から、男女ともに父親よりも母親のコミットメント因子との関連が多くみられたことから、同性の親の結婚生活コミットメントに対する認知が結婚願望に影響するのではなく、どちらかという、母親の結婚生活コミットメントがどうであるかに影響されると考えられる。菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村（2002）は、親の養育態度と児童期の子供の抑うつ傾向との関連についての研究で、子供の抑うつと関連が認められたのは母親の養育の暖かさのみであり、父親の養育態度との関連は見られなかったと述べている。本研究から大学生になっても性別に関係なく父親より母親の影響が強いということが出来る。さらに、岡本・上地（1999）は、青年は同性の友人と親密な関係を築く際、男性は父親に対する脱依存、女性は両親に対する脱依存がみられるが、男女とも母親に対しては、理解し、ある程度心理的に密着した関係のもとで親密な友人関係が築かれると述べている。このことから、本研究においても、男女共に母親の影響を強く受けているのは理解できる。

また、この両親のコミットメントと本人の結婚願望の関連における男女差は、男女の結婚観の差を表しているとも考えられる。男子学生は母親が愛情に依って結婚を維持していると認知していると結婚願望が強くなるが、女子学生は母親だけでなく父親も愛情をもって結婚生活を続けていると認知している方が結婚願望が強いという結果が得られた。この男女差から、男性は結婚において夫よりも妻の満足度の方が大事であり、妻が幸せなら結婚する価値があると考えるが、女性は夫婦どちらも結婚生活に満足することが大事であり、夫婦揃って愛情ある結婚生活を維持している光景を目にすることで結婚したいとなるのではなかと推察できる。

5. 今後の展望

今回の調査によって、夫婦関係は子供の結婚願望に影響を与えることが明らかとなった。しかし、本研究では両親が結婚生活を継続している理由によって夫婦関係を調査したため、すでに両親が離婚している者は対象者から除いた。その結果、両親の夫婦関係が比較的良好である者が多かった。今後の課題として、調査対象者に両親が離婚している者も含め、大学生の結婚願望にどのような要因が影響しているのか、自身の恋愛経験やキャリア

志向なども含め、より多様な要因を検討する必要がある。

引用文献

- 神原文子 (2004). 女性にみる結婚の意味を問う 家族社会学研究, **15**, 14-23.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理科学研究, **47**, 248-258.
- 齊藤嘉孝 (2012). 定位家族の親夫婦の関係性が若者の結婚への態度に与える影響-大学生を対象とした量的調査の結果より- 法政大学キャリアデザイン学部紀要, **9**, 369-379.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村敏則 (2002). 夫婦関係と児童期の子供の抑うつ傾向との関連-家族機能および両親の養育態度を媒介として- 教育心理科学研究, **50**, 129-140.
- 城島博宣・白河桃子・幸田達郎・城佳子 (2012). 女子大学生の結婚観と職業観の調査 生活科学研究, **34**, 149-158.
- 宇都宮博 (2004). 両親の夫婦関係に関する認知が子供の自己肯定に及ぼす影響-女子青年の場合- 健康心理科学研究, **17**, 1-10.
- 宇都宮博 (2005). 女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知: 子供の目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント 教育心理科学研究, **53**, 209-219.
- 山内星子・伊藤大幸 (2008). 両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響: 青年自身の恋愛関係を媒介変数として 発達心理科学研究, **19**, 294-304.